

---

## 9. その他の動物

---

本県レッドデータブックの前版までは「その他の動物」の項で陸産・淡水産貝類と真正クモ類を取り上げていたが、本改訂版では陸産・淡水産貝類を独立項目として本項から分離させた。そして本項では残ったクモ類（節足動物門クモ形綱）に加えて新たなレッド種を含むミミズ類（環形動物門ミミズ綱）を取り扱う。

### 1 石川県のクモ類相

石川県のクモ類相は2008年までに352種がその分布を公表されており（新海・安藤・谷川 2008）、そのほかに未公表の既知種が50種ほどあるから400種ほどが判明していることになる。本州でクモ類相がもっとも解明されている数都府県の種数はいずれも500種を少し越えているから、石川県でもそれくらいの種数が生息していると思われる。また白山のクモ分布は全国の高山帯を有する山地の中でもっとも調査が進んでいる山地であって、標高別分布が詳しく分析されている（徳本 2006）。従って本県のクモ相解明のレベルは十分というにはまだ遠いものの、全国的にみれば進んでいるほうであり、クモ相構成の概観は把握可能なので、それをもとにして以下の記述を行う。

本県全域内のクモの種構成について徳本（1990）は日本固有種および中国東部・韓国分布種、世界広域分布種を併せたものが85%を占め、それに旧北区・全北区系を併せた北方系が12%、南方系といわれる東洋区系が3%含まれており、典型的な日本中部温暖帯性クモ相であるとしたが、その状況は現在も変わっていない。加賀地域は高い山がない能登地域に比べると高山帯をもつ白山（2,702m）山系を域内にもつのでクモ相はより豊かになるが、基本的には能登地域と大きく変わることはない。ただ、能登地域は加賀地域に比べるとクモ相の調査はかなり遅れている。能登地域では近年、日本国内の他地域で消滅またはそれに近い状態になっている昆虫が現在も多数生息している箇所があることが明らかになってきている。クモにおいても同様なことが見られる可能性があるため、今後の調査が必要である。なお、当然のことであるが白山国立公園地域は標高が高いのでそこ以外の本県内地域よりクモ相にふくまれる北方系要素の率が高い。

石川県が本州日本海側での分布北限となっているクモは2008年現在ではマルゴミグモ以外には知られていない。しかし2000年ごろには本県が日本海側の分布北限であったキシノウエトタテグモやキノボリトタテグモの分布北限が2008年現在では新潟県に変わっているように、マルゴミグモも今後の調査の進展によって北限が北の県に移るかもしれない。これに対して本県が分布西限となっている種は9種あり（徳本 2006）、比較的多いが、これらの大部分の種は今後の調査の進展によっても分布限界県が本県より西に移る可能性が低い。これは白山がわが国で高山帯をもつ山の西限であり、本県より西には高山帯をもつ山地が存在しないからである。白山の高山帯にはヤスダサragモ、クロヒザグモのようにヨーロッパやシベリアから北海道にかけて分布している種が生息していたり、エゾハリゲコモリグモのように北海道と青森県、秋田県だけにしか分布を知られていない種が白山ではブナ帯上部に分布していたりするというような型の分布を示し、わが国北部での分布地と白山との間の分布知見がまったくなかったり、わずかしかないといった種が多い。これらのことはわが国の高標高地のクモ分布調査が遅れていることを象徴するもので、このことを明らかにしたのは白山のクモ調査が挙げた功績ともいえよう。

なお、近年、本県において北方系と思われる海浜性種イソコモリグモの本県内における生息状態の歴史的推移ならびに生態解明が詳しく行われ、それにもとづいてこのクモの保護対策の検討が進められた。そしてその成果は現在、環境省のレッド種となっている本種に対する保全対策の指針となって、現在、全国的な本種保全活動が推進されている。

本県レッド種クモとしては環境省レッド種クモと同じくキシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモ、イソコモリグモの4種をあげることにした。

## 2 石川県のミミズ類相

ミミズ類は土壤動物の代表的一群で、土壤中では植物遺体などやそれらの分解物を土壤と共に食物として摂取、消化し、多量の糞便を排出するという生活をしており、これが非水溶性高分子物質を水溶性低分子物質に変えることになって、土壤の肥沃化に大きな貢献をしていることは有名である。しかし、この動物群の分類学的研究はわが国ではこれまであまり進んでいなかったが、近年はかなりの種数が同定可能になってきた。しかし、本県ではこの動物群の研究はこれまでほとんど行われていない。ところが、その例外的存在がハッタミミズという日本一長いミミズで、これが河北潟周辺、特に往時の河北郡八田村付近に高密度に生息することが1920年代に行われた石川県天然記念物調査の過程で明らかにされた。

他の土地では見られないこの変わったミミズの正体について研究を依頼された当時の東北帝国大学教授畑井新喜司博士は1931年にこれを新種として記載し、和名をハッタミミズと名づけた。そしてこのミミズの属する *Drawida* 属は東南アジア方面に多いこと、八田村という狭い区域にだけ高密度で生息すること、また、このミミズにまつわる土地の伝説から推定すると、突然この地に出現したとも思われることから、徳川時代の加賀藩の豪商であった銭屋五兵衛が南方との密貿易の際に持ち込んだ植物の根部土壤に付いて持ち込まれたのでないか、との説を述べたので、学界でも著名なミミズとなって現在に至っている。

本種はそれ以来、長らく日本国内のどこからも見つからなかったが、近年、琵琶湖周辺の数箇所にも生息することが判明し、本種の日本への分布由来についての研究も始められた。それによるとこのミミズの属するジュズイミミズ科（数珠状の胃をもつのが特徴）はミミズ類の中でも地球上での発生がもっとも古いグループで、現在の *Drawida* 属の地球上での分布も東南アジアの熱帯だけではなく、中国東北地方にまで及んでおり、日本国内にもハッタミミズとは別種のジュズイミミズが本州の東北地方などに生息することが分かってきた。このようなことからハッタミミズは南方からの人為的移入種ではなく、日本本土がまだ古いアジア大陸から分離する以前からそこに生息していたジュズイミミズが、分離した日本列島にも持ち込まれ、それが先祖となって現存のハッタミミズが生じてきた可能性が高いと見られている。石川・滋賀両県のハッタミミズのDNA分析も進んでおり、その結果が本種の地史的由来を明らかにしてくれるであろう。従って本種は億年単位の古い型の生物の生き残りの存在で、他の動物でいえばオオサンショウウオ、ムカシトンボ、シーラカンスのような生きた化石の一つともいえるかもしれない。

また、滋賀県と石川県のハッタミミズは同種ではあるが、遺伝子型が若干異なる可能性も高く、そうとなれば現在は地方型も種多様性維持を進めてゆく上で、重要な保護対象と考えられているから、この狭い範囲にしかないハッタミミズの個体群維持をはかることは重要課題となる。

ところがレッドデータブックの本種評価記述書に記したように、本種は半湿田の環境を好み、このような水田は現在の大型耕運機を駆使する稲作には向いていない。そのためこのような水田はこれまで客土によって乾田化がはかられてきたが、この工事を実施すると本種が激減することが分かっている。本種現存地域の水田でこれまでにまったく客土をしなかった水田はほとんど存在しないから、現在は本種が辛うじて生き残っている水田が散在するというのが実情で、そのような水田でさえその存在範囲がきわめて狭い。

そしてこのような過去に客土された水田でも本種が残っている水田は、比較的湿りけの程度が高いという特徴がある。またこのような湿地帯の水田を客土した場合、年数が経過すると地盤が徐々に下がるので、さらに厚く客土する作業も行われ、このような追加工事がおこなわれると本種は完全に消滅する。

水田という耕作形態は人為による絶えざる維持作業によってのみ存続が可能となるが、これと本種の生存環境維持とをどのように並立させるかが今後の大きな課題である。

その他の動物選定種一覧

区 分	クモ類	種類数	ミミズ類	種類数
絶滅	—	—	—	—
絶滅危惧Ⅰ類	—	—	ハッタジュズイミミズ	1
絶滅危惧Ⅱ類	イソコモリグモ	1	—	—
準絶滅危惧	キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、 ワスレナグモ	3	—	—
情報不足	—	—	—	—
地域個体群	—	—	—	—
	計	4	計	1

(徳本 洋)

新旧対応表

		前回						3
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 0	絶滅危惧Ⅱ類 1	準絶滅危惧 2	情報不足 0	地域個体群 0	カテゴリー外 2
今 回	絶滅 0							
	絶滅危惧Ⅰ類 1							ハッタジュズイミミズ
	絶滅危惧Ⅱ類 1			イソコモリグモ				
	準絶滅危惧 3				キシノウエトタテグモ キノボリトタテグモ			ワスレナグモ
	情報不足 0							
	地域個体群 0							
	カテゴリー外 0							

※ヘグラマイマイは、陸産貝類に分類